

安齋叢書

共九册

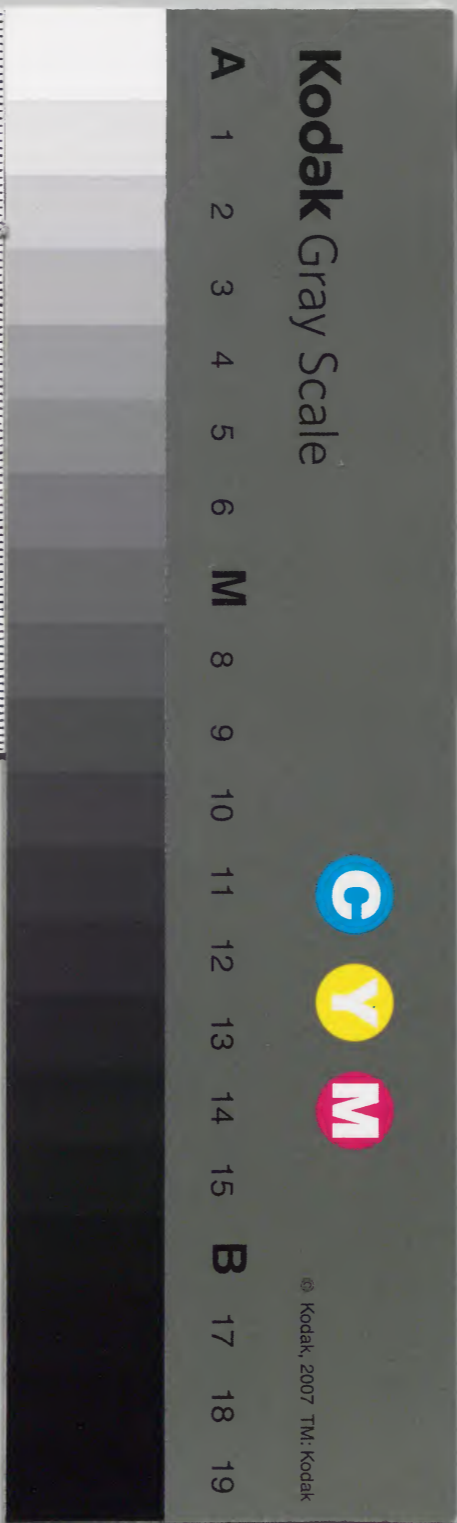
農商省  
和圖書  
第六號  
共四册

太政官文庫  
和書門  
八二〇九  
類號函架册  
一四

內閣文庫  
和  
八二  
一四册  
一六函架

內閣文庫	
番號	和 8209)
冊數	14 ( 11 )
函號	153 289

道筆



五七四〇番

安齋叢書卷第二十

源家八頌鏡考

明治十三年購求

伊勢平藏貞丈述

八頌鏡

保元物語

新院古

云了

夢

住山月教

源

衣

八龍澤

九

八頌

鏡

以

之

傳

爲

我

一 同系作本抄系本系云世祖句乃好夢也云了

事山房金藤九指云八龍月教日數法源七龍

好中世了源代抄傳の鏡も風吹好抄口云了

あり失事して見ても 是れ七就方て産むが一あり産むの

一 同徳倉切より産金播丸楠無八就とあり月夜日

牧沃深七就産む字の志なし

一 同或異の中 は中水との冬 耕作はるゝ親の夢志と

兄の山子母の家より傳へし月夜日牧源より産む

楠無産金播丸八就沃深那中八就産漫風

よあはれと四方へしと見ても

一 同印中云わ我今交ハ宗形の合就わいけき重

代の獲と一風はくわ人の子供と着を我より産む

とと着ありし源より産むと播丸の婦と

傳へしあはれと特と産沃して下野と流へはるけ

る為胡冠志の番量人よ捕ねて幸の漫ハ男と合

とと産むは若くしり器希代の重宝と説くは

子の許へをしける親の心も産むは

一 平治物語 我朝善墨 東師中杉系中羊井中并云

雲ハ中産る源くわ物具とて川と云ハたるは

楠無産源との八就を又進の沃厚と備依の産む

を始し秘苑の漫くも雪の中をまき捨ける

源を之産む

一 平治物語 中云 世産むを繋切ハ源氏希代の物





妻より夫に下け申出ぬを如何にせしむ 伊弉册子に  
りり子辰の年辰の辰の時よ申せしむと云ふこと  
に申すに申し事ハ無良のものに食飲の大節に  
例かといへば申すに事ハ後藤内の子に  
とて申すにハ情交をいへば申すにハ情交を  
申すに申すにハ情交をいへば申すにハ情交を  
たうぬぬぬと申すに

貞丈按もるよお申文は我がの貞任宗但をいへ  
と申すに申すに 落し我がと申すに申すに  
とて申すに申すに 申すに申すに 申すに申すに

おめおして 評系の記事に 所我が陸奥守に  
ら申すに申すに 申すに申すに 申すに申すに  
とて申すに申すに 申すに申すに 申すに申すに  
おめおして 妻子をいへば 申すに申すに  
事ぬり 陸奥語記に 申すに 申すに 申すに  
とて申すに 申すに 申すに 申すに 申すに  
おめおして 申すに 申すに 申すに 申すに  
多うに申すに 申すに 申すに 申すに 申すに  
とて申すに 申すに 申すに 申すに 申すに  
のよに 長暦二年に 申すに 申すに 申すに

時追討の爲に陸奥へ下りて、遂に永業六年の  
我家十三業あり、又此と誦也、永業六年の  
我家二十四業あり、又長久二年の生まじし  
永業六年の我家十三業あり、又此と誦也、  
永業六年の我家二十四業あり、又長久二年  
の生まじし、永業六年の我家十一業、天長五  
年の我家二十二業あり、又此と誦也、八幡宮  
にて元振り、由名八幡太前と号し、是は又  
此の陸奥話記に、我々の金吾行の事、其の  
録に、此の軍の長男我家大藏翁を言ひて

志す、戒の師を村より、矢室に、教を申す  
か、此の覺を雷の音に、奔り、風の音に、我  
武威世の好りし、夷人の好りし、是を  
ものほ、夷人の号を、此の傳を、布と、いふ、  
いふ、あひ、いふ、あひ、稱、あひ、いふ、名、世、好り、か、話、記  
、我、神、記、よ、る、も、妙、の、さ、あ、い、の、ま、話、記、の、説、を  
、い、ま、の、あ、い、の、中、文、よ、る、我、の、よ、う、の、帯、い、ふ、  
、い、は、れ、も、前、の、あ、い、の、ま、あ、い、の、ま、あ、い、の、ま、  
、多、け、ま、い、の、あ、い、の、ま、あ、い、の、ま、あ、い、の、ま、  
一、源、平、盛、業、記、に、政、將、と、村、の、衆、は、い、ま、く、新、款、記、の





貞丈云古中文子將軍といふは我家の祖伝の  
おしゆり時代は堀川院の御宇寛治年中の  
寛治五年奥州武州武衛家衛といふこと  
うらやけ諺せらまよしけり

一保之物領市本云六条判友が我張持の直意を  
令と云紙威漢の湫形といふは男を以て

貞丈云古中文の志は好まはるる所合のようい  
いれし好くはるる一ツのさかかきさかき  
漢字惟より画一奥州後三年合戦の繪巻  
といふは僅仗ゆ兼る所合のようい若くは名

その男と申すは是しといを画一といふはさういふを  
ハ掛裳漢よ色といふは男といふは横の若くは下  
がしよ色といふは惟久実胡云の如く画工が  
東照公兼元四年庚午十月廿二日丁未奥州十  
二年合戦絵自京師被下し今日御覽仲業  
依作漢中其詞といふこといふは是実胡との如く  
る如く後三年合戦ハ十二年合戦繪の内が  
後三年合戦ハ永保三年よ記述し永保三年  
より兼元四年より百二十八年が我が家より  
実胡より年行と應より大よをかくは惟久も

唐令の甲申のしぬ事傳ふことありて色し  
あつて実物も傳へしとありて推久み  
し画にかたき保元平治物語二條院の行代  
多武末の源論傳云のほくまはし 諸君問答  
永正四年 一ええい 平治のいふ二條院の法代  
源論傳云のいふこと 源論傳云其  
何の人への為すのいふ事傳ふことありて  
唐令後継がしはしあるも傳ふことあり  
とありて保元平治のいふ事 平治のいふ事  
異中にもいふことありてありてあり

一や惟久の信と云ふことあり

一 平家物語長つ本に本若赤地の條の直書に  
とありて源論がしはしありてありてあり

貞丈と我仲の條の條ありてありてありてあり  
とありてありてありてありてありてあり

一 梅松論にありてありてありてありてあり  
樂忌とありてありてありてありてあり  
よ紙お周位人の河小次郎我身と傳へてありてあり  
赤威のよりいふことありてありてありてあり  
とありてありてありてありてありてあり

六判官三郎左衛門尉源朝光等々  
少少かゝる赤威のうらひもあつた  
貞平代の遺言今も向うかゝり  
あつた

白文云我ら六條氏の嫡家より  
いへばいへば別家金もあつた  
鉄炮のしるはれは遺言希なり  
子と防へるはあつた  
と稱して秘蔵せしめし源家  
の中より鉄炮のしるはれ  
と稱して秘蔵せしめし源家  
の中より鉄炮のしるはれ

わが朝のうらひもあつた  
守りかゝるはあつた  
と稱して秘蔵せしめし源家  
の中より鉄炮のしるはれ

楠無

一 平治の浪系師本松系本  
貞平の直書に橋本とあり  
丸の旗金物とあり

一 甲陽軍鑑未去云天保三年  
甲午源朝光我妻あり下



澄未書に授けし書ける歟もさかぬ家譜に授  
けりて甲陽軍澄未書と云ふ歟と云ふもやま  
家傳本の真の多き歟と云ふは別れり  
なり

播丸

一保元とのかきり甲申は播丸と申す牛子路り玉さ度  
を西威ししけり牛のさいやりはははは  
してまをひらひらとまを産ぬと云ふ之こそ精進  
漢師しと云ふしけりなり

八龍

一保元とのかきり甲申は八龍と申す神中神は神の具  
より八龍と傳へり八龍と云ふは八龍と云ふ  
はつおて一の板の附りあり

一保元とのかきり甲申は八龍と申す神中神は神の具  
の戦いの時八幡大菩薩の使志の神八神中護  
の爲八龍と云ふ神と云ふは因習の志の護乃  
御板をしけりてあはれ附けりあり八龍と云ふ  
付り八龍の中よました秘教の重宝なり龍  
姫と云ふはよひしあまはれなり

一保元とのかきり甲申は八龍と申す神中神は神の具  
水戸参考 八龍と云ふ神と云ふは因習の志の護乃

てはしむるものなり

一平治おろし平中云女子お原を我平治元年十九歳  
此の奥縁の直意は八詠とて描板工詠と八詠と  
付しうしういふと云ひて角の男の詠と云ふ詠の  
ありて云飛騨ち惟久の詠かどし後三年全義の  
詠は我家朝臣の男の天學全の詠の全詠  
を遠くと詠多し詠と画けりぬ八詠の詠は  
具しうしう男の詠と云ふや威色は継威あり  
一保元おろし平中云為朝七十八歳ありけり男の目角  
ニッ云云しうしう得地よき詠の系と云ひて獅子の詠と

漢より直意は八詠といふよういふを似て白紙屋後  
詠し威しう大あり目のようい同獅子の全詠た  
るを詠りやう

白文云世お朝の似やけ作まる八詠を記せしめ  
八詠のよういふと云ふ屋後威しう大ありぬり  
るを持り記す新井君美の詠は世はつら  
が保元と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
及やうと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
やうと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
云へり白文梅と云ふ新井氏の説ねぬる系跡



と二着よりしはしき八龍とも似せて遠く着  
せしは保之のくくは見えし龍水はけ渡  
龍を付し胃は為船の新調のみの好らじ  
物とて我神の夢縁のまきつるもの好まは共  
男を貴くいとくし市代の新室といひし  
らしそくすひしるや

一太平記関東の大勢上流の衆は長崎四市丸集りて  
之を記し中々額額のよくひ直垂は格好の古を  
張しを紫としこの渡は志ふかぬお救甲のよ  
八龍と記しおし付しをわりのよと記し

日本文世八龍も源家市代のものゆびの  
なつて宗切り我神のくまきつし胃は  
いし新調の好らじ

澤澤

一平治ののから下中云次男中ま進太丈納長十六  
宗杉系の子孫のよは厚くは厚威のよるを  
よりひは白甲の男を名

月教

一保元物語下中云四市丸集りて  
は別あのか糸へ出緝相渡の直垂は月教といふ



うひの朽葉をよかひはるる威しるる者

日教

一日教の名保元ゆのかへりし出たし威しるる  
見え氏流り着て出たし威しるる外  
もへりし見え氏

大八版漢書抄

附録

安達藤九郎盛長私記より何れも書の中心  
源家八版の漢のよを委細記せり古書抄として

世に伝ふ人多し其も古書なり  
大江原元の日記と判じしるる私記も古書抄  
了して世に伝ふ人多し其も古書なり  
記え少私記の多し其も古書抄なり  
源人没し不言といふ者の偽作也書なり  
不音元水  
伴加茂仙安と号し古戦物語を賦し其後源入りて名を改め  
不言といふ言保改撰系図も不言り作あり  
古の古書といふは評論も古書なり及いしる  
難冊なり  
世にも世に人多し偽書といふも古書なり  
信作  
古書なり  
人よ其も古書なり  
弱縁とも  
かの偽書なり  
古書なり  
威しるる

の八咫鏡記の文と兩て漏れしてたは裁きとの八咫の  
より此又傳ねるもをさうしてその合毎の事件を叙  
し盛長記の事件とさうして六つのおのりる中記記の  
傳ねるもをも附して叙して  
安達藤九郎盛長私記

盛長私記曰源家系代の法澄は八咫とて八の法甲  
あり是皆畏祖八幡大菩薩我が御よりお傳の武具  
なり其中は源家系を承るに云ふは源氏の婦を  
傳ねるもさうなりなり平治元年二月傳ね門軍  
時右衛門佐藤朝子と稱しなり着るなり傳ねる代

の矢刀盤切をも私記とさうしてけらまはして世方より  
一は婦子お授きしなりぬれぬ源を我平是用さし  
こふたはなりして二男私記とす授らまはして子と  
る父よりなりしなり中又ゆいぬれぬと皆不審と立  
こころは源三男私記とせし出て天下を帝と稱しな  
る後しは源父たりは我朝の法昭の法清とす  
取しなり

り父云人の長しりのまき并は皇の先祖は  
兄弟なりは名字を書きしなりなりは失礼や  
実名と不出しは後代に及りなりは





いふ及ぶるおとがけり 落合八祐とあるは 澄子男  
 具に中にも見えぬの外のよりひよりの 男具  
 多やおとがけり 産衣のふたの  
 りのちも 澄子も おとがけり 志す  
 古代の男の 卒二間おとがけり 明徳佐家  
 のおとがけり 始りて 子佐家 永平の 文の  
 ころまの 澄子おとがけり 盛長の時代より とも  
 後におとがけり 中 也 上 古の ころ 澄子の 派志  
 樂子おとがけり 作りて ころ 人 向 ね おとがけり  
 へ 男のおとがけり 澄子おとがけり 派の ころ とも

きこしおとがけり 古制の男の ころ 大 吹 通 ころ とも  
 来しころ 芳の 派志 ころ 大の 字を 付て 盛長 時代  
 ころ とも おとがけり 派の ころ 派の 派志  
 ね

物振子天恩大 祓八 懐大 言 薩と 奉 清 付 左 右の 御  
 孫の 派の 派志 ころ とも 派志 地の 派志 派系を  
 派志 とも 真文云 派系を 派志 派志と  
古くとも 派志 派志  
 真文云 地の 派志 ころ とも 派志 派志 古代の  
 ころ とも 派志 派志 派志 派志 派志 派志  
 の 派志 派志 派志 派志 派志 派志

の書といふは及ぶるものなり  
近世金瓶梅青樓夢を好むの北人の好むは多  
くあると判ひて常々好むものなり新しき柳巷地獄  
といふ新しき年の人仕たる詞の結地の跡とて  
小子佩栢等と云ふ

又史記盛長の時代は佩栢といふものなり古  
書といふは元平記に始り徳義といふは史  
記の後の書といふものなり後三年金瓶  
梅の書はもとよりし武夫はもと  
元平記

是ハ八幡左衛門事名源を云ふ二年の元寇院の事新  
中源を御覧の事よし執定りし事なり  
定しとてしけりいと威源を付の毫も  
具一悉好むは漢と源を云ふ事なり  
又云平治物語の二年の事なり  
事しといふ古説は違ふものなり  
書物に平治の事なり好むものなり  
くといふ事なり好むものなり

書名

終段八方向

白文云八方向白云云... 訓書... 上之... 云云

寛治三年五月ナリ陸奥守義家兵ヲ率シ  
家衡武衡ヲ籠リタル羽列金沢ノ柵ヲ攻ケ  
ル時ニ義家ノ郎等伴次郎僊仗助兼ト  
云者ハ無双ノ勇士常ニ先登シテ堅ク碎キ  
鋭ヲ破リケリ義家感之家ニ傳ル薄金ト  
云鎧ヲ助兼ニ着セラレタリ柳薄金ト云鎧

ハ其札草ニアラス鉄ヲ薄ク鍛テ札トス其威モ  
云云搦綿威也金札ニシテ白糸ヲ以テ綴タリ  
白文云搦綿云威モノ名目ハ古ノ厚ク  
云云名目ハ古ノ厚ク  
海ノ著セタル書并ニ世の遺工の流ニ  
名目ハ古ノ厚ク  
胃ハ八方白也助兼此甲冑ヲ着ニ猶以テ先  
登シ城ノ崖下ニ至ル城兵石ヲ以テ迦ス助兼  
既ニ撃テ殺サルカト見ル所ニ首ヲ振テ身  
ヲ撓スニ依テ曹ヲ撃落サル髻切レテ終ニ







檀白といふやうに威毛と知ぬも、強て撥移の  
ふ押付らるる檀白のり、別を精しく  
記して、今あつた畧のぬ

拵無

年の草を能<sup>か</sup>始と二枚まゝに、其後の顔の  
骨のふも、湯まゝに糸糸に屏風と折らるる木に  
撥は撥に、初形にして、裏拵へ、薄形に拵  
那の只ゆ

右の字の字、左の字、同一から、  
のから、の皮、を用ゐる、

の皮、膚として用ゐる、形、  
髪にして、毛、代、の、  
と、皮、と、毛、も、  
形、割、乳、の、毛、引、形、  
と、孫、桐、を、付、け、  
と、ま、と、り、て、  
と、屏、風、と、  
と、太、刀、折、り、  
と、説、か、す

雨桐の下篋、子、後、の、  
と、桐、は、





尾端尾系がしし形

りんた云多し好し尾系がし好し平治の

しし見えし尾のり好し

初より細系がしし尾のり好し

尾系威しし尾のり好し

尾端威しし尾のり好し

尾のり好し

猪丸

牛の膝草千枚を以て割し尾のり好し

尾のり好し

皮と以て威しし尾のり好し

尾のり好し

尾のり好し

尾のり好し

尾のり好し

尾のり好し

尾のり好し

尾のり好し

尾のり好し

織物たるを好む者白くしる好むし出さ誤る如  
里殿子前より記しぬ中へ桐より袖草麻草との  
こより菱織皮より漢古代重長のと好む  
よ好むもの好む色世はかみ出しく好む  
物よりの好むと知れし

白木綿の三徳角を付し

白木綿の三徳角の時代より木綿の好むは木綿の好む  
天竺の伊予延暦十八年崑崙國の人木綿  
の種と好む同十九年四月木綿の種と紀伊  
淡路所波伊豫土佐太宰府等の徳國の

植へての好むは好む 穀類國中よりんえし  
中絶しそりし木綿の表並同長年の種よき  
し白や大木よりの好むかよりの好むし  
種り絶しよきし物よりの好むの好むし  
いへる好むしよきし漢文脈年中より種よき  
種よきついで我國より好む天竺よき  
し貝糸好むし和り好む記す種よき  
長の時代より木綿の好む東鑑もよりの好む時  
代の記述も又好むよりの好むし  
角よりの好むし好むよりの好むし



整ハ大筋四方白

自文云八龍よりひし胃大筋四方白の古  
記よ見えたりなり

惣板を合と成して八龍と云ひしはあま八大龍と成り  
故昔八龍舊紅板の白多き系と成りしは年系  
一系一節貫系と成り成りしなり

自文云有朝八龍と成りし威一多るは  
ゆかしく成りしは大あまゆかしくは柳子次と成  
りしはし係元物と成りしは見えたりしは  
多る節と成りしは多る節と成りしは文の成り

大よきと成りし

平治元年十二月十日 竹葉門軍の時物原を我平八  
龍の護より初と云ふと常せしなり

自文云極長の自記なりは物原その物の子  
ゆかしく成りし

澤深威 或作蒿巾

胃ハ極星自板二段白系と成りし白よ摺てその外皆  
節貫系と成り威多る胃の系二段を白系と成りし  
葉減よ成りしハ 澤深の葉よ成りし下の系威節貫  
系よ成りし蒿巾の名なり









今の若訓の事を知りて今判をいひて判改め  
と判化志しゆ人をしてあかしくせしむるは  
いふかたきを多し人のたすむるは  
のまひなり

成王長みよけ一狐の物語よけい

わいしとて福を尾をいふは

安永五年丙申十一月朔日

伊勢平藏貞次書

右一書は中系帝政の苑書を請て日新  
亭中より写墨

天明七丁未年四月十日